

開墾のはじめは豚とひとつ鍋

乃南アサ『チームオベリベリ』

約140年前、その女性は、北海道十勝の原野へ渡った。オベリベリ～和人たちによって「帯広」とされた新天地。明治の先進教育を受けた彼女は、いかに生き抜こうとしたのか。開拓に身を投じた実在の若者たちを基にした、著者が初めて挑む長篇リアル・フィクション。

(「BOOK」データベースより転載)

思い込みというのは恐ろしいもので、僕は「トウダイモトクラシ」は「大正デモクラシー」の類いだと高校を卒業するまで思っていたし、「ダイバーシティ」は「海に潜るダイバーのように地下組織が跋扈する都市」だと本気で思っていた。そんな僕の思い込みリストにまたひとつ加わった。それが今回の名言。十勝の人ならたぶん一度は聞いたことがあるのではないかとという一句。銘菓「ひとつ鍋」の由来になっていることでも有名な開拓の苦労が偲ばれる句だ。みんなは、この句の意味をどうとらえていただろうか？

「開墾はそれはそれは大変な苦労だった。豚と鍋ひとつしかないようなところから始めたんだ。」

こう思っていた人は僕と同じ。でも、よく考えてみてほしい。「鍋ひとつ」ではなくて「ひとつ鍋」なんだよね。この違いを考えると…

チームオベリベリによる帯広開拓は本当に何もなかったところから始めたものだったが、これでもか、これでもかと苦労が降りかかってくる。人力での開墾は遅々として進まず、馬を導入するのはだいぶ後になってから。人の手だけで開拓にあたっようやくたどり着いた収穫の直前にイナゴの襲来。それでもあきらめず、また一から始める。そうしてようやく寒冷の地に合う畜産に光を見出そうとする彼ら。豚の生産は希望の光だったのだ。そしてこの句が誕生する。開拓団の中心メンバーが徐々に顔を合わせて酒を飲み、話に花が咲く。酒の肴がないので、豚にやるエサをつくろうと煮込んでいた鍋からひょいとはつまむ。そこで一人が「落ちぶれた極度か豚と一つ鍋」と口にした。その句に対して依田勉三さんは「落ちぶれたと言ったらいかんがね。わしらは今、何もなくてから這い上がろうとしとるんだ。その気概がみえんというのは、どうもいただけん。」と納得しない。そういったやりとりが幾度かあった後にできた句が「開墾の初めは豚と一つ鍋」であった。「なべひとつ」では言い表せない開墾の厳しさとそれに向かう気概が伝わってくる。

『チーム・オベリベリ』は晩成社幹部の一人である渡辺勝の妻、カネの視点で描かれる。カネは共立女学校の第1回生であり、卒業後同校で教員としても働いた。そんな時代の最先端の女性であった彼女の開拓地での生き様は見事と言うしかない。どんな苦難にたいしても辛抱強くあたり、子どもたちに読み書きを教え、アイヌの人々にも隔てなく接するカネの慈愛あふれる姿こそ、後に「帯広教育の母」とも呼ばれる所以であろう。

物語は開拓を始めて7年を描いたところで終わるが、彼女は1945年、終戦まもなく86歳でその波瀾万丈の生涯を閉じる。帯広が開拓されてそれほど時間が過ぎていないことに改めて驚く。君たちは彼女のフロンティアスピリッツの継承者でもあるのだ。

ところで姉と昔話をしていた時のことだ。僕が「子どもの頃、うちで天ぷらといったら葉っぱみたいなのだったよね」と話したら「うん、コンフリーね」というので「それ何？」と聞くとすかさず姉は答えた。「豚のえさだ」

なんと合浦家も「ひとつ鍋」だった!?

(注 コンフリーはかつて家畜の飼料として利用されていました。一時期食用として流行したことがあったと言われています。現在は毒性が認められ食用とはされていないようです。)

